

<「知るっば!久留米」 令和2年10月1日(木) 12:30~放送分>

城島瓦 ～第1回～ 城島瓦の歴史

<ゲスト： 渋田瓦工場 渋田良一さん>

坂本 MC (以下「坂本」)

「知るっば!久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。

10月は、久留米の伝統産業であります『城島瓦』をテーマにお送りしていきます。

ゲストは、この方です。

ゲスト: 渋田良一さん (以下「渋田」)

城島町の渋田瓦工場、代表の渋田良一です。

よろしくお願いします。

坂本 よろしくをお願いします。

渋田さんは瓦作りの職人さんですが、何歳ぐらいから瓦作りを始められたのでしょうか？

渋田 今、私が70歳ですが、20歳ぐらいから親父の手伝いをやってきました。

坂本 ということは、約50年前からってことですね。

それは、実家の家業が瓦屋さんだったので継がれたということですか？

渋田 そうですね。

家内工業というか、職人さんも何人か雇っていましたが、ひとり息子でもあるし、やっぱり親父の後姿を見て、自分がなんとかせにやいかんみたいな気持ちに駆られてですね。

親父が昔ながらの職人だったんですが、本当に人を使うのが下手で、何でも自分でせにや気が済まんような人だったので、やっぱり職人さんともモメるところとかも見てきたのもありまして。

坂本 そうなんですね。

渋田さんは、何代目になるのですか？

渋田 うちはまだ新しく3代目ですが、創業100年近くになりますね。

坂本 創業100年といえば老舗って感じですが、それでも城島では新しい方なんですか？

渋田 そうですね。

坂本 ということは、そもそも城島瓦ってかなり昔から作られていたということですね。
それは、いつぐらいからなんですか？

渋田 久留米藩に有馬の殿様が来られるときに瓦職人を伴ってきたということですから、400年くらい前からですね。

坂本 実は、来年が有馬入城400年なので、その瓦も400年の歴史があるということですね。
そして、殿様が瓦職人を伴って久留米に入城したということですね。

渋田 文献によりますと、有馬のお殿様は、久留米に来たらずはお城造りをしないとイケないってことで、瓦職人を連れてきたそうです。

坂本 わざわざ連れてくるということは、腕のいい瓦職人だったんでしょね。

渋田 そうですね。お殿様は丹波篠山から久留米に入城されているので、そのあたりからわざわざ連れてきたということですからね。

坂本 城島瓦の起源はわかりましたが、広い久留米藩の中でも城島で瓦の製造が盛んになったのにはどんな理由があったんですか？

渋田 それこそ筑後川の恩恵と申しますか、まずは瓦に適した粘土を探したところ、いい粘土が城島に豊富にあったことと、重量物の瓦を運ぶのに筑後川を利用できたことですね。
昔の運搬は水路か陸路ですが、陸路は馬車や大八車がメインだったでしょうけど、今みたいに道路は整備されていなかったはずで。
となると、瓦の運搬は、水路が重要になりますよね。

坂本 そうでしょうね。
陸路は今みたいに整備されていないから、きっとガタガタ道だったでしょうね。

渋田 それこそ私の幼稚園時代でも、道には馬車の糞がいっぱい落ちていた思い出があります。

坂本 そんな時代だからこそ、筑後川の水運だとスムーズに運搬できるし、都合がよかったんでしょね。

渋田 なので、当時は有明海を渡って長崎や佐賀方面に販路を求めたようです。

坂本 粘土もやっぱり城島地区の粘土が瓦作りに適していたんですか？

渋田 そうですね。瓦用の粘土には粘り気があって、焼いたときにシャンとしとかなないといけなくて、クタクツとしてはいけないんですが、そのあたりが城島の粘土が適していたんですね。

坂本 私も色々なところで城島瓦を目にするのですが、城島の鬼瓦って有名じゃないですか。
鬼瓦っていろんな顔があるんですけど、あれは職人さんがひとつひとつ考えて作るものなんですか？

渋田 瓦が百済から渡ってきて、1400年くらいになるとですよ。
それで、屋根瓦も鬼瓦も種類がいっぱいあるわけなんですけど、歴史がある分だけ昔の人の思いを引き継いで、継承していく部分と、鬼氏さんの新しいデザインもあるからですね。

坂本 鬼瓦の製造には、鬼氏さんという方がいるんですね？

渋田 屋根瓦を作る職人と、鬼瓦を作る鬼氏は別にいます。
鬼瓦を作るには、屋根瓦とは別の専門的な技術が必要なので。

坂本 そこは分業されているというか、それぞれ専門があるんですね。
それは、やっぱり代々受け継がれているのですか？

渋田 そうですね。
鬼瓦は鬼瓦屋さん、一般的な屋根瓦は瓦屋さんと受け継がれています。
鬼氏さんは、それだけ専門的な技術を求められるということですね。

坂本 最近では瓦屋根の和風住宅、和風建築が少なくなっているような気がします。
なので、瓦もあまり使われなくなっているのかなと心配しているのですが、そのあたりはどうですか？

渋田 和瓦、いぶし瓦は、瓦の中でも高級品なんですよ。
そういうこともあって、最近では城島で瓦製造をしているのは5~6軒しかないんです。
昭和初期は、城島に140軒から150軒の瓦屋があって、職人さんも相当な数になっていたと思います。

坂本 なるほど、わかりました。
まだまだお話はつきませんが、渋田さん、興味深いお話をありがとうございました。
城島瓦に関する質問やお問い合わせは、三瀨総合支所2階久留米南部商工会内にあります城島瓦協同組合までお願いします。
城島瓦協同組合の電話番号は、0942-64-3649です。
次回は、『城島瓦の製造工程』をテーマにお届けします。
渋田瓦工場、渋田良一さん、来週もよろしくをお願いします。